トラウマはどこへ行った？
――米軍ベトナム撤退から40年をへて

松　岡　　完

1. 変わる戦争像

1973年1月27日、パリ和平協定（Paris Peace Accords）調印。3月29日、米軍のベトナム完全撤退。少なくともアメリカ人にとって、ベトナム戦争（Vietnam War）は事実上終わりを告げた。あれから40年以上が過ぎ去った。ソ連とのデタント（Détente）はほどなく厳しい対決の時代に道を譲り、その後冷戦（Cold War）の終焉がもたらされた。ソ連崩壊後、アメリカは地上に残された唯一の超大国となった。ほぼ1世代半ないし2世代にあたる歳月はアメリカに、そしてアメリカ人が抱くベトナム戦争のイメージに、じつに大きな変容をもたらした。

たとえば2004年大統領選挙を見ればよい。当時現職のブッシュ（George W. Bush）に挑戦して一敗地にまみれた民主党の候補は、ジョン・ケリー（John Kerry）上院議員だった。あるいは2008年大統領選挙。オバマ（Barack Obama）が史上初めてアフリカ系アメリカ人（African American）つまり黒人として大統領の座を射止めたが、相対する共和党候補はジョン・マケイン（John McCain）上院議員だった。ケリーとマケイン、この2人には重要な共通点がある。いずれもベトナム・ベテラン（Vietnam Veteran）、つまり帰還兵だということである。

ケリーは帰国後いったん反戦運動に身を投じた。しかし、政治家として経験を積み、いざ大統領選挙に臨むにあたっては、海軍哨戒艇の艇長としてベトナムで英雄的に戦った勇士のイメージを前面に押し出した。「私はジョン・ケリーです。そしていま今日、私の任務のためにここにやってまいりました（I'm John Kerry, and I'm reporting for duty）」――そして敬礼。2004年7月29日、彼の大統領候補指名受諾演説は、軍人たる立場から国家への忠誠と献身を約束することから始まった。[1)]

マケインはパイロットとして出撃中に撃墜され、捕虜（POW）となった。「ハノイ・ヒルトン（Hanoi Hilton）」とあだ名される捕虜収容所で、アメリカ人捕虜はほぼ例外なく大変な苦労を強いられた。だがそれに耐え抜き、しかも他の捕虜を先に帰国させたことが、彼の不撓不屈の精神を証明するものとして高く評価された。ケリーもマケインも、ブッシュ政権末期にアメリカが陥ったイラク戦争（Iraq War）の混迷から、軍務経験を生かしてこの国を救いうる人物として期待されたのである。

それに少し先だつ時期、クリントン（Bill Clinton）大統領やブッシュ大統領などに、州軍入りをはじめとする手段でベトナム行きを忌避したのではないかという疑惑が噴出した。結果的にホワイトハウス入りを果たせなかったとはいえ、ケリーとマケインもその一歩手

---

1) 邦訳はNHK衛星放送第1ニュースの同時通訳による。

前まで行った。いまや、兵士としてベトナムに赴いた経験が、アメリカ政治上の資産となる時代が訪れたのである。

40年前はまったく違った。元兵士は社会から英雄視されるどころか、無視され、忌み嫌われた。戦場で無垢なベトナム農民を相手に残虐行為の限りを尽くしてきた男たち。そこにいるだけで周囲の人々に惨めな敗北を思い出させる存在。アメリカ人が見たくない、そして眼前から消えてほしい厄介者。

命長らえてようやく戻った祖国に冷たくあしらわれた結果、少なくない者が心を病み、みずから命を絶った。1982年の映画『ランボー（*First Blood*）』では、シルベスター・スタローン（Sylvester Stallone）扮する主人公が警官に無理無体な扱いを受ける。彼は大暴れのあげく、元上官に説得されて投降する。戦いはもう終わったのだと告げる元上官に、彼はこう叫び、そして泣き崩れる。

> 何も終わっちゃいないんだ。俺にとって戦争は続いたままなんだ。あんたに頼まれて、必死で戦ったが勝てなかった。そして帰国したら空港で非難囂々だ。赤ん坊殺しとか悪口の限りを並べやがった。あいつらは何だ？戦争も知らんくせに！頭にきたぜ！……俺はな、世間じゃのけ者なんだ。戦場じゃ仁義があってお互い助けあった。わかるか……戦場じゃ100万ドルの兵器を任せてくれた。でもここじゃ駐車係の口もない！みじめだよ。どうなってるんだ？……大勢戦友がいた。戦場には頼りになる親友がいた。ここには誰もいない。……[2)]

それがいまや、まったく正反対のイメージになった。冷戦期、アイゼンハワー（Dwight D. Eisenhower）やケネディ（John F. Kennedy）、ブッシュ（George H. W. Bush）大統領は、第2次世界大戦（World War Ⅱ）の英雄として選挙運動を展開した。それぞれ連合軍総司令官、魚雷艇PTボートの艇長、海軍のパイロットである。いずれの場合も、従軍経験が英雄イメージの形成に、そして票の獲得に活用された。同じことが、ベトナム戦争でも起きたわけである。

オバマの大統領就任演説が、変化を如実に示している。アメリカは2008年秋のいわゆるリーマン・ショックで受けた経済的な打撃から立ち直っていなかった。外にあってはテロとの戦いは果てしなく続いていた。イラクでもアフガニスタンでも、ブッシュが始めた戦争の行方はまったく見えなかった。オバマはアメリカが「危機のさなか」にあることを認めた。アメリカが直面する難題は「現実」だ。「深刻」であり、「多数」だ。したがって「容易に、あるいは短時間で対処することはできない」。だが、彼は高らかに宣言した。「しかしアメリカよ、これを知っておいて欲しい。それは解決できるのだ」。

彼は続けた。アメリカは偉大な国だ。それはけっして神に与えられたものではなく、われわれの祖先がみずから勝ち取ってきたものだ。危険を恐れず挑戦し、行動し、さまざまなものを創造してきた祖先たち。たとえば国外に雄飛した人々。開拓に命を削った人々。そして、いま生きるわれわれのために「コンコード（Concord）やゲティスバーグ

---

2) 邦訳はカロルコピクチャーズ／東宝東和映画『ランボー』字幕による。

(Gettysburg)、ノルマンディー (Normandy) やケサン (Khe Sanh) といった地で戦い、命を落とした」無数の勇士たち。[3)]

コンコードとは、独立戦争 (Revolutionary War) の重要な戦場である。ゲティスバーグはいうまでもなく南北戦争 (Civil War) の激戦地。ノルマンディーは第2次世界大戦でアイゼンハワーが指揮した連合軍による一大上陸作戦の舞台だった。そしてケサンでは、1968年1月末、いわゆるテト攻勢 (Tet Offensive) と前後して北ベトナム (ベトナム民主共和国) 軍とアメリカ軍ががっぷり四つに組み、ベトナム戦争でも屈指の大攻防戦を展開した。

オバマ就任の日、つまり2009年1月20日こそ、ベトナム戦争イメージが公式に180度の転換を遂げ、アメリカがみずからの負の歴史を克服した日だといってもよい。あの忌まわしき戦争が、建国以来200年このかたアメリカの輝ける歴史を彩ってきた、そしてアメリカ人なら誰でも知っている戦い――独立戦争、南北戦争、第2次世界大戦――とまったく同列に扱われた、画期的な瞬間である。しかも、よりによって大統領就任演説の中で。

2. 3つの転換

ベトナム戦争イメージのいったい何が変わったのか。第1に、不正義の戦争から正義の戦争への転換である。それは40年前、不名誉な、やるべきでなかった戦争だった。国際的な共感も得られず、わずかに韓国やオーストラリアなど数カ国がアメリカとともに派兵したにすぎなかった。肝心のアメリカ国内では反戦運動の嵐が吹き荒れた。無数の反戦デモの中には、「戦争犯罪人 (War Criminal)」と大書したジョンソン (Lyndon B. Johnson) 大統領の写真をプラカードに掲げたものさえあった。

介入拡大の過程でアメリカ政府がいかに誤ちを繰り返し、国民を欺いてきたかを赤裸々に分析した、いわゆる『ペンタゴン・ペーパーズ (*The Pentagon Papers*)』の暴露。反戦運動の中で起きた学生の射殺。南ベトナムからは、弾圧に抗議する僧侶の焼身自殺。ナパーム弾で焼かれ、泣き叫ぶ少女のいたいけな姿。南ベトナム警察長官によるゲリラの路上処刑。ソンミ村ミライ地区でのアメリカ軍兵士による住民虐殺事件……。アメリカ人の脳裏に刻み込まれたベトナム戦争の記憶には、まったくろくなものがなかった。

だがいまやベトナム戦争は正しい戦争、やる価値のあった戦争となった。それはレーガン (Ronald Reagan) 大統領のいう「高貴な大義 (Noble Cause)」のための戦いだった。レーガンの後継者、ブッシュ大統領は「やり方こそまずかったが、わが国がベトナムに参戦したことは正しかったのだ」と断言した。ベトナム戦争の代名詞的存在だったマクナマラ (Robert S. McNamara) 国防長官はのちに、アメリカが犯した失敗は認めつつ、それが「価値や意図についての誤りではなく、判断と能力による誤り」にすぎないと強弁した。[4)]

---

3) 『朝日新聞』2009年1月24日および『CNN English Express』編集部編『オバマ大統領就任演説』(朝日出版社、2009年)、48-53頁。

4) Gerard J. DeGroot, *A Noble Cause? America and the Vietnam War* (Harlow, U.K.: Pearson Education, 2000), x. Bill McCloud, *What Should We Tell Our Children About Vietnam?* (Norman, OK: University of Oklahoma Press, 1989), 22. Robert S. McNamara, *In Retrospect: The Tragedy and Lessons of Vietnam* (New York: Times Books, 1995), xvi.

第2に、戦争の侵略者・加害者だったアメリカが、被害者に身を変じた。アメリカは膨大な爆弾を投下し、インドシナの大地に無数のクレーターを残した。動植物も、土壌も、水も、枯葉剤散布の影響を受けた。被害者はもっぱらベトナム人、カンボジア人、ラオス人たちである。戦争当時生を受けていなかった無垢の子供たちも含まれる。そのすべてをもたらしたのがアメリカであり、歴代アメリカ政権の指導者たちであり、彼らを権力の座につけたアメリカ人だった。

だがいまやアメリカは被害者である。少なくとも、一方的な加害者意識はじつに希薄になっている。彼らの意識転換の媒介となったのが、58,000人を超える戦死者（KIA）である。遺族たちはワシントンを訪れ、ベトナム戦争記念碑（Vietnam War Memorial）に刻まれた息子、父、兄弟などの名前を見つけては涙にくれ、その上に紙をあてがって鉛筆でなぞり、それを持ち帰る。2,000人あまりの行方不明兵（MIA）も、その調査にベトナム（ベトナム社会主義共和国）側がまったく協力的でなかったことがアメリカ人の怒りを生み、彼らの被害者意識を増幅させた。マケインのような捕虜の存在も同じ作用を示した。

ケリーをはじめ、ベトナム帰還兵全体の扱いも同様である。戦争直後、彼らに冷たく当たりすぎたという後悔も手伝って、アメリカ社会は彼らに憐憫の情を覚えるにいたった。彼らもみずからの経験を語り始めた。『地獄の黙示録（*Apocalypse Now*）』（1979年）、『プラトーン（*Platoon*）』（1986年）、『ハンバーガー・ヒル（*Hamburger Hill*）』（1987年）などの映画は、ジャングルと泥田の中で苦悶する、ごく普通のアメリカ人青年の姿を銀幕上に描き出した。彼らの辛苦への同情と共感は、ほどなくアメリカ社会それ自体への自己憐憫に転じていった。もちろん、インドシナ半島の人々が味わった苦悶はほとんど顧慮されないままに。

ベトナム戦争はかつて「間違った戦争（Bad War）」と呼ばれた。そこでベトナム人を相手に戦った若者もまた「間違った兵士（Bad Soldiers）」だった。だが彼らは、敗れたとはいえ、また多少人道にもとる行為を残したとはいえ、限界状況で最善を尽くした「素晴らしき兵士（Good Soldier）」となった。そして、彼らが命を賭して担った戦争もまた、アメリカが200年このかた積み重ねてきた「素晴らしき戦争（Good War）」の列に加えられることになった。

第3に、うちひしがれた、内向きのアメリカが、自信満々で世界に立ち向かう国になった。戦争直後、アメリカは敗戦の負の影響に圧倒されていた。軍事力のみならず経済力や技術力においても世界最強の、いや史上最強の国家たる自信が、こともあろうにベトナム人ふぜいに打ち破られてしまったからである。将来への希望も失われ、人々は国際主義から孤立主義へ大きく舵を切った。1970年代は「私主義（Meism）」に染まった。

アメリカ伝統の価値観も大きく揺らいだ。戦争を開始し、反戦気運の高まりにもかかわらず容易に終息させられなかった政府。それを含む既成の社会秩序。それを支えてきたさまざまな権威。すべてへの信頼が失われた。政治・政治家・ワシントンへの不信が、1976年のカーター（Jimmy Carter）、1980年のレーガンの大統領当選につながった。

アメリカはみずからの過去に思いをいたすようになった。ポリティカル・コレクトネス（PC）が求められ、インディアンは「アメリカ先住民（Native American）」に、黒人（ブラック、ニグロ）は「アフリカ系アメリカ人」になった。過去の中南米政策も顧みられ、1977年にはパナマ運河返還条約が結ばれた。第2次世界大戦における日系人強制収容や広島・長崎

への原爆投下も反省材料となった。

ところが、それは一時期のことにすぎなかった。たとえば大統領による勝手気ままな戦争に歯止めをかけるべく成立した戦争権限決議（War Powers Resolution）は、現実にはほとんど効力を発揮できなかった。不敗神話を打ち破られ、国民の信頼を失い、予算も減らされたアメリカ軍は、必死の努力でどん底からはい上がった。アメリカ社会も自信と価値観を取り戻し、再び自由と民主主義を高く掲げ、それを世界に拡げようとし始めた。

変化の原動力は、第1に冷戦の勝利だった。地球規模の大きな戦いにアメリカは勝利した。ソ連は消えた。東南アジアでは東南アジア諸国連合（ASEAN）が発展した。共産主義の間違い、とりもなおさずアメリカが追い求めてきた自由や民主主義といった価値の正しさは自明だった。正しい戦争の中の重要な戦場、それがベトナムだった。

第2にベトナム側の変化があった。1995年、ハノイ政府は過去の怨念に封印してアメリカとの国交を樹立、ASEANにも加盟した。2000年にはクリントン大統領訪越も受け入れた。共産党の一党独裁体制こそ維持しているものの、もはやアメリカと変わりない資本主義社会が生まれた。アメリカがかつて望んだ、アメリカ的生活様式の移植が現実のものとなった。

第3に、全米同時多発テロ、いわゆる「9・11」である。テロやイスラム原理主義を新たな敵として、アメリカは自由・平和・人権など、さまざまなものの守り手を自任するようになった。愛国心が国民を一つにしたばかりでなく、アメリカに対峙するものはすべて悪とみなされるようになった。

3. 残された傷

40年の長きを要したものの、アメリカはベトナム敗戦で受けた打撃からほぼ回復した。だが厄介なことに、癒しの効果はあくまでも「ほとんど」であり、「すべて」ではなかった。失敗の記憶は完全に払拭されたわけではなく、傷跡はいまだに残っている。というのも、アメリカが太平洋を遠く隔てた地で敗北を喫したという事実だけは消えなかったからである。独立戦争から第2次世界大戦にいたるアメリカの戦歴に、ベトナム戦争はこの1点でついに及ばなかった。

映画『ハートブレイク・リッジ　勝利の戦場（*Heartbreak Ridge*）』（1986年）で、クリント・イーストウッド（Clint Eastwood）は海兵隊の古参軍曹の1人に扮する。彼らは年若の上官から「オー・ワン・ワン（0-1-1）」呼ばわりされる。戦歴を誇るのはいいが、なんのことはない、朝鮮で引き分け、ベトナムで負け、つまり0勝1分1敗ではないかというわけである。この映画では主人公が若い海兵隊員を鍛え上げ、1983年のグレナダ介入で勝利をおさめる。華々しい戦闘は、自分たちは「もう0-1-1じゃないな」と僚友につぶやく彼の言葉で締めくくられる。[5)]

実際に1980年代初頭のアメリカ国民はグレナダ介入の勝利に熱狂した。しかし、現実は彼らが思うほど甘くはなかった。アメリカがこれ以降、いくら戦争を繰り返し、勝ちを積み重ねたところで、ベトナムでの敗北という暗い事実を消すにはいたらなかった。この

---

5)　邦訳はワーナー映画『ハートブレイクリッジ　勝利の戦場』字幕による。

1敗があるかぎり、アメリカの勝率が100％に戻ることもなかった。

そこに、ベトナムの記憶を払拭する唯一無二の好機と思われるものが到来した。湾岸戦争（Persian Gulf War）である。突如クウェートを犯したイラクの指導者フセイン（Saddam Hussein）は「第2のヒトラー（Adolf Hitler）」に擬すべき敵役だった。ブッシュ大統領は「新世界秩序（New World Order）」構築をうたいあげ、ベトナム戦争以来初めて50万人を超えるアメリカ軍を送り込んだ。国連安全保障理事会の決議や、30カ国近い多国籍軍、100カ国以上による対イラク経済制裁などは、アメリカが掲げる正義の証明だった。圧倒的な空爆に続く地上軍の侵攻は「100時間戦争」と称されるほどの完勝をもたらした。ブッシュ大統領は、これで「ベトナムの亡霊はアラビア半島の砂漠の砂の中に埋もれ去ったのだ」と欣喜雀躍だった。[6)]

だがすべてはまさに砂上の蜃気楼だった。これほどの大規模な戦いをもってしても、ベトナムにおける敗北の記憶を消すことはできなかったからである。とすれば、グレナダやパナマなど、弱敵に小規模な戦いをいくら挑んだところで、やはりアメリカ人の自尊心が満足させられなくても仕方なかった。

ベトナムをはるかに上回るような、それこそ第2次世界大戦に匹敵するほどの勝利を得られれば、ベトナムをめぐるアメリカ人の記憶に変化が生じる可能性はある。逆に、ベトナムがかすんでしまうような大失敗を経験するという荒療治もありうる。これまでのところ、ソマリア介入にその危険が一番大きかったといわれ、実際にベトナムとソマリアの合成語「ベトマリア（Vietmalia）」さえ生まれた。だがベトナムの記憶と、その二の舞を恐れる気持ちが生きている限り、それほどの大災厄に突入することもまたむずかしい。

この傷――敗北という歴史的事実――をなんとかしないかぎり、アメリカはけっして元どおりにはなれない。世界の超大国として自信を持って行動することもできない。そこで、「ベトナム修正主義者（Vietnam Revisionists）」と呼ばれる人々が、新たな処方箋を携えて登場した。彼らはなんとかベトナム戦史を書き換えようと試みた。

第1に、ベトナム戦争はアメリカにとって勝利だった。政治・外交的な側面からいえば、北の共産政権、国内の反政府勢力の脅威にさらされた南ベトナム（ベトナム共和国）は、1954年の成立からほどなく消滅してもおかしくなかった。その弱体な国に援助を与え、政府と軍を強化し、1975年まで持たせたのは、勝利以外の何物でもない。しかも、アメリカがベトナムで戦っている間に、東南アジアも東アジアも繁栄を享受し、親米勢力の連携によって広い地域で平和が保たれたではないか。「わが国の介入は、18年間――1954年から1972年まで、1900万人を全体主義の圧政から救った」のだと自画自賛するのは、ニクソン（Richard M. Nixon）大統領である。[7)]

第2に、百歩譲って、この戦争の敗北を認めたとしよう。しかし、戦争終結の2年も前に、アメリカはみずからの意志でこの地から撤退している。アメリカ軍が降伏したわけでも、ワシントンが陥落したわけでもない。アメリカが被ったのはせいぜい戦術的・局地的・一時的な後退にすぎない。戦争に負けたのは南ベトナムであり、アメリカではないのだ。いやそれどころか、アメリカ軍は、個々の戦闘では1つ残らず勝っていた。だからアメリカ

---

6) 油井大三郎『日米　戦争観の相剋』（岩波書店、1995年）、206頁。

7) Richard Nixon, *No More Vietnams* (New York: Arbor House, 1985), 164.

軍に敗北の責めを帰すのは間違っている。負けたとすれば、臆病風に吹かれた本国の政治家たちのせいだ。彼らをそうさせたのは、間違った報道で国民を欺いたメディア、とりわけテレビだ。そもそも、最初から本腰を入れて、ハノイを壊滅させる気で、場合によっては北京を敵にまわすほどの決意をもって戦えば、必ず勝てたはずだ。

だが、徒労だった。いくらこう主張しても、40年前にアメリカ軍がベトナムから撤退したのは事実である。1950年以来、反共国家建設のために当初はフランスを楯に、その後はアメリカが直接ベトナムに関与してきたすべてが破綻したわけである。共産主義との戦いの代理人たる南ベトナムの敗北は、アメリカの「近代的な、ハイテクを用いた軍備、兵力、軍事ドクトリンの限界」を示すものでしかなかったのである。[8)]

ベトナム戦争はじつに多種多様な反戦歌（Protest Songs）を生み出した。その最も有名な、そして象徴的なものの1つに『花はどこへ行った？（*Where Have All the Flowers Gone?*）』がある。花は少女に摘まれ、少女は夫を娶り、夫は兵士となり、兵士は墓に身を横たえ、墓地には花が咲く。そして長い、長い時がたつ。ジョーン・バエズ（Joan Baez）やピーター・ポール＆マリー（Peter, Paul and Mary）、ブラザーズ・フォア（Brothers Four）らの歌声を懐かしく想起する者も少なくないだろう。

この歌をもじっていえば、ベトナム経験がアメリカにもたらしたトラウマは、いったいどこへ行ってしまったのか。アメリカのベトナム戦争イメージは、まさに黒から白へと大転換を遂げた。アメリカが被った巨大な傷もおおむね癒された。戦争それじたいへの悔悟も、アメリカの過去への自省も薄らいだ。ただ1つ、後に残ったのは忌まわしい敗北、それも「泥沼（Quagmire）」の記憶と、長期化する戦争再発への嫌悪感である。「二度とごめんだ（Never Again）」「ベトナムを繰り返すな（No More Vietnams）」だけが生き残った。

グレナダ、ペルシャ湾岸、旧ユーゴスラビア、ソマリア、イラク、アフガニスタン…。アメリカはベトナム戦争直後から今日にいたるまで、いたるところで対外介入を繰り返してきた。泥沼にさえならなければ――そう見えさえしなければ――アメリカ人は戦争を容認してきたのである。万一、戦いが長期化し、犠牲が増えたら、戦争目的など振り捨てて引き揚げればよい。その後始末、たとえばアメリカが味方の側に立って派兵したはずの政府や勢力の行く末も、戦後の社会再建も、地元民に任せておけばよい。

40年前、ベトナムがそうだった。戦いはすべて、ベトナム化（Vietnamization）政策によって膨大な軍事援助・経済援助を注ぎ込まれた南ベトナム人に委ねる。面子を保ちながらアメリカ軍が撤収できさえすれば、サイゴン（現ホーチミン）の反共政権がどうなろうと知ったことではない。当時サイゴンで取材中だったあるアメリカ人ベテラン記者が喝破したように、パリ和平協定とは「アメリカのベトナム離脱のための出国ビザ」にすぎなかった。アメリカ人の脳裏にあったのは、戦場でのアメリカ人の犠牲、そして本国での自分たちの生活、つまり戦争が自分たちに及ぼす負担だけだったのである。[9)]

---

8) McNamara, *In Retrospect*, 322.

9) 産経新聞「20世紀特派員」取材班『20世紀特派員』6（産経新聞ニュースサービス／扶桑社、1999年）、234頁。

【参考文献】

生井英考『負けた戦争の記憶――歴史のなかのヴェトナム戦争』三省堂、2000年。
枝川公一『英雄は帰ってきたか――アメリカ人のヴェトナム戦争症候群』講談社、1985年。
白井洋子『ベトナム戦争のアメリカ――もう一つのアメリカ史』刀水書房、2006.
平田雅巳「『ベトナム症候群』とアメリカ外交」草間秀三郎・藤本博編『21世紀国際関係論』南窓社、2000年。
藤本博「アメリカ合衆国の『世界体験』としてのベトナム戦争――『ソンミ虐殺』をめぐる記憶の変遷とその遺産を中心に」歴史学研究会編『シリーズ歴史学の現在6　20世紀のアメリカ体験』青木書店、2001年。
松岡　完『ベトナム症候群――超大国を苛む「勝利」への強迫観念』中公新書、2003年。
マリタ・スターケン（岩崎稔ほか訳）『アメリカという記憶――ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』未來社、2004年。
Egendorf, Arthur, *Healing from the War: Trauma and Transformation after Vietnam* (Boston: Shambhala, 1986).
Head, William & Lawrence E. Grinter, eds., *Looking Back on the Vietnam War: A 1990s Perspective on the Decisions, Combat, and Legacies* (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1993).
Isaacs, Arnold R., *Vietnam Shadows: The War, Its Ghosts, and Its Legacy* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1997).
MacPherson, Myra, *Long Time Passing: Vietnam and the Haunted Generation* (Garden City, N.Y.: Doubleday, 1984).
Podhoretz, Norman, *Why We Were in Vietnam* (New York: Simon & Schuster, 1982).
Record, Jeffrey, *The Wrong War: Why We Lost in Vietnam* (Annapolis, Md.: Naval Institute Press, 1998).